

地図と痕跡——大岡昇平『武蔵野夫人』論

大原 祐 治

はじめに——

大岡昇平は、自らの戦場経験および俘虜としての経験を綴った連作『俘虜記』（一九四八〜一九五一年に各誌で断続的に発表された後、一九五二年に現行の形でまとめられる）を完結させる直前の一九五〇年、それとは大きく異なる内容を持った物語——すなわち、戦後を生きる二組の夫婦と一人の若い復員兵によつて展開される〈姦通〉を描く『武蔵野夫人』（初出「群像」一九五〇・一〜七、九）を執筆する。初版単行本（一九五〇・一、大日本雄弁会講談社）の帯にある「武蔵野夫人 文学座公演・映画化決定作品 読売新聞社一九五〇年度の文学ベスト・スリーに第一位獲得の問題作」という文言からもわかるように、この小説は発表当時、大きな話題を呼んだことで知られる。

それにしても、どうして大岡は『俘虜記』完結の直前に、このような小説を書いたのか。連載開始に先立って大岡自身が語るところによれば、その狙いは「人間の性格を分解して心裡を社会的条件の結果として捉える」こと^①にあったのだという。そして、このことは、大岡が後年自ら開示したこの小説に関する「構想ノート」の中に、

「『武蔵野』は姦通の社会的条件をもとにして組み立てられねばならぬ」という文言が見出されることと確かに対応している。

ここで想起しておくべきなのは、大岡がそれまで書き綴ってきた連作『俘虜記』もまた、戦場における兵士および収容所における俘虜の行動を様々な「外的条件」の帰結として捉える、という基本的認識に貫かれた小説だったということだろう。²⁾ こうした認識において、確かに『俘虜記』と『武蔵野夫人』とは、大きく異なる物語内容とは裏腹に、むしろ明確な連続性のもとにあると言える。

しかし、『俘虜記』が戦争／戦場という極限的な「外的条件」によって兵士の行動が規定されるさまを何重にも屈折した文体で描くのに比べれば、『武蔵野夫人』で描かれる戦後社会における姦通の「社会的条件」は、一見いかにも単純に思われる。それは端的に言って、一九四七年一〇月の刑法改正によって姦通罪が廃止されたという一事に尽きるだろうからである。

とはいえ、大岡の狙いが、倫理観の大きく変容する戦後社会において、姦通というスキャンダラスな内容を提示してみせるということだけにあつたわけではないだろう。このことは、なぜ大岡が物語の舞台として「武蔵野」という空間を選択したのか、ということと深く関わる。大岡自身が後年語るところによれば、この小説は本来『武蔵野』という題で書かれるはずだったのであり、³⁾ その意味で物語を支える「条件」とは、「武蔵野」という空間そのものだったことになる。実際、『武蔵野夫人』の冒頭部分で展開されているのは、武蔵野の「はけ」と呼ばれる空間そのものに関する細かな描写であり、またそこに住まう主要登場人物たちの来歴に関する詳細な説明である（先に言及した「構想ノート」には、こうした設定に関する詳細なメモが残されている）。

この小説における物語空間および登場人物に関する詳細な設定とその描写については、同時代評の中でも言及が見られる。ただし、それはしばしば否定的な文脈においてである。例えば、この小説に対していち早く反応し、自ら戯曲版を書いた福田恆存はこの小説について、「第二回目ですでに終つてしまつてゐ」て、「すべての人物や状況が出そろつたとたんに」物語が終わつている、と苦言を呈しているし、中村光夫もまた、「第三回か四回以後になると、作中人物のお互の心理的なシチュエーションがきまつちやつて、その間に誤解が起る余地がない」と同様の批判を行っている⁽⁷⁾。

もちろん、すべての論者が一様に同じ批判を展開しているわけではなく、例えば三島由紀夫などはむしろ、「三回目までが非常に苦しく」「未熟」さを感じさせるが、「おしまいの二回」などは「息もつかせずに読んだ」と述べている⁽⁸⁾。実際、ベストセラーになるからには、多くの読者たちにとって後半の物語展開は、メロドラマとしての高い訴求力を持つものだったことは確かであろう。

しかし、こうした評価を下す三島にしても、一方でこの小説に満ちている「自然描写」については「夾雑物」であると批判している。「詳細に究められた武蔵野の地形をバックにして、大きな構想のロマンが展開されるのである」と期待したのに、その後の物語にはそれに見合った「起伏」が見られなかったという山本健吉の批判⁽⁹⁾もまた、概ね同様のことを指摘するものであった。小林秀雄に言わせれば、作者は「何故俺はこんなに自然の美しさを執拗に語つて了つたのであらう」と「自問」しているのではないか、ということになるのだが⁽¹⁰⁾、しかし『武蔵野夫人』とは果たしてそのような小説なのだろうか。大岡が物語の「条件」としての「武蔵野」について筆を尽くして書き込んだことは確かだとして、しかしそれは単に「自然の美しさ」を強調するだけのことだったのか。

従来、この小説を論ずる者はしばしば、この小説に充溢している「武蔵野」の「地形学」に関する詳細な叙述に注目してきた^①。そして、こうした読者のあり方を象徴し、そのような読解を支えてきたのが、創元文庫版（一九五二・二、創元社）より巻頭に置かれるようになった「武蔵野夫人」小説地図」と題された地図であろう（図1および2参照）。しかし、小説『武蔵野夫人』に記されていたのは、果たして本当に美しい「武蔵野」の「自然」だけだったのか。

本論文の狙いは、この小説のとりわけ空間描写に注目する議論の中で取りこぼされてきた問題を浮上させることにある。端的に換言すれば、出発点の問いは次のようなものになるだろう。「武蔵野夫人」小説地図」に導かれる読者は、この小説の何を読み取り損なう



図1

創元文庫版『武蔵野夫人』（一九五二・二）巻頭に置かれた「武蔵野夫人」小説地図



図2

現在の流布本文である新潮文庫版『武蔵野夫人』（初版一九五三・六、改版一九九九・六、新潮社）巻頭に置かれている「武蔵野夫人」小説地図

のか？ この「地図」には武蔵野におけるどのような〈現実〉が書かれていないのか？

本論文で試みたいのは、いわば地図を持たずにこのテキストを渉猟し、占領下の「武蔵野」に関する〈現実〉の位相を読みとることである。

I 「はけ」の歴史性あるいは非歴史性

まずは、『武蔵野夫人』について論ずる者がほとんど必ず言及する「武蔵野」、とりわけ作中で「はけ」という名の下に語られる空間が、実際には本文中でどのように提示されるのかということについて、改めてテキスト冒頭部分を検討することから始めたい。

主要な人物たちが登場する前に、語り手はまず、「中央線国分寺駅と小金井駅の間」に位置する、「野川」と呼ばれる水量豊かな小川の流域の地理について詳細な描写を行う。古代から現代に至るまでの長大な時間の中で、水の流れがどのように変遷し、その結果としてどのような地形が形成されて今日に至るのか、ということ語る語り手の言葉は饒舌である。

しかし、ここで考えておきたいのは、地形学的知見に関する饒舌な言葉に先立って冒頭第一段落で語られているのが、「はけ」とは具体的にどこを指すのか、そこに住んでいるのは誰なのか、ということをめぐる「土地の人」たちの認識に関する叙述だったことである。古代から現代へ、という大きな時間の流れに比すとき、こうした「土地の人」の認識の中での歴史は、ごく小さな時間の幅しかもたない。端的な言い方で示しておくなら、冒頭に示されていたのは、悠大な自然の時間と卑小な人間生活の時間との対比ではないだろうか。

しかも、さらに興味深いのは、この冒頭部分にまず記されたのが、道子や勉、そして大野といった主要登場人物たちによって引き継がれようとしている宮地家の系譜に関する話ではなく、「はけ」の荻野長作¹なる人物に関する説明だったことだろう。それは具体的には次のような内容であった。

荻野家は野川の流域に広がる傾斜地において、古くから農家を営む家柄であったが、「三十年前」にその地所のうちの相当の部分が、「ほとんどたゞのやうな値段」で、宮地信三郎——静岡出身で、東京の鉄道省事務官だった人物——の手に渡った。従って、この冒頭部分に記されていたのは、一連の物語の舞台となる「武蔵野」の「はけ」において、物語を構成する主要人物たちの生活の歴史はたかだか「三十年」程度しか堆積しておらず、しかも、現在の所有者はこの土地に根生いの者でさえない、ということだった。つまり、ここで宣言されていたのは、これから展開される物語が、太古から現在に至る長い時間の中で形成された武蔵野の地層で言えば、ごく表層の部分において繰り返り広げられるものでしかない、ということなのだ。

さらに、以上のことを確認する上で興味深いのは、「はけ」の地理に関する詳細な説明に先立って、「土地の人」たちは「はけ」という呼称の由来も知らなければ、それが本来どこを指すのかということさえ正確には共有していない、という叙述が冒頭第一段落に配置されていたことだろう。語り手曰く、「はけ」とは本来荻野家の地所一帯を指すのではなく、その地所を流れる小川の水源である湧水がある窪地を指すはずであるのに、「人々は単に長作の家のある高みが「はけ」だと思っている」。あたかもここで語り手は、「はけ」に堆積する時間の厚みに比べ、人々の生活と認識は何とも浅薄であることか、と語っているようである。

その上、目を引くのは現在における「はけ」の所有者である宮地家の系譜に関する語り手の説明である。荻野

家から「はけ」の地所を購入した宮地信三郎は、その名が体现するように「三男」であったが、静岡の旗本だったという宮地家が「明治初期の混乱」で四散する中で辛くも明治政府の内に職を得たという人物だった。しかし、戦争によって息子たちや弟を亡くした彼は、自らの地所をそのままの規模で資産として残し、引き継ぐことが出来ない。そこで、彼は資産の一部を「甥の大野英治」（亡き妻の妹の息子）に譲渡しつつ、縮小した資産をかうじて娘の道子に引き継ごうとする。道子は、大学教員でフランス文学の翻訳を手がける秋山と結婚して地所を維持しようとするが、戦後俄に訪れた「出版景気とスタンダールの流行」によって泡銭を手に入れた秋山は多額の相続税を負担する代わりに譲渡委任状を取り付け、これをわがものとするべく、自分好みに屋敷を改造したりしている。

つまり、冒頭部分に書き込まれた「はけ」の歴史とは、いわば「はけ」という名前Ⅱ記号に対応する意味内容が、短い時間のなかで、萩野長作から宮地老人へ、そして秋山や大野へと慌ただしく変化していく過程に他ならない。そして、そのような状況下に宮地信三郎の弟の息子であり、宮地の姓を嗣ぐ勉が復員してくる……というところから、物語は開始されることになる。道子と勉が道ならぬ恋によって結ばれることで、「はけ」の宮地家とその地所が引き継がれるのか、あるいは「はけ」の宮地家はわずか二代でその系譜を途絶えさせることになるのか、物語の主軸は後半に進むにつれ、次第にこうした財産問題へと収斂していく。

この小説を以上のように捉えるならば、物語展開の鍵を握る人物は復員者・勉だということになる。実際、大岡昇平自身も「構想ノート」において、「主人公」は元「学徒兵」である「馬鹿の色男」だと端的に記していた。しかしこの勉が、同じく「構想ノート」で「女主人公」と規定されていた道子の前へ姿を現した瞬間、道子は彼

を、嫌悪の対象だった「はげの荻野長作」の次男・健二に重ねてしまう。つまり、道子にとって勉は「健二に似た者」として登場しているのであり、両者に関する道子の記憶はいささか混線しているようにさえ見える。少なくとも勉は、唯一無二の「主人公」としての存在感を帯びることなく、物語のなかにふらりと姿を現す。

勉と健二の復員に関わる一連の出来事を時系列に沿って整理すれば以下のようになる。まず健二が「終戦の翌年（引用者注、一九四六年）復員」し、道子の前に姿を現すようになり、次いで翌年（引用者注、一九四七年）の「暖かい二月の朝」に、復員してきた勉が姿を見せるが、その後、勉は「はげ」を離れ、都内にある「以前の学校の友達の家へ寄寓して学生生活を送り出す。そして、ある日のこと、健二が宮地家の敷地に入り込んできて「馬鈴薯はいらないかね」などと話しかけて道子はその不気味さに驚かされるという出来事が起こる。

問題は、この時の道子が、敷地内に入り込んできた健二の姿が復員してきた日の勉に似ていると感じていることである。言うまでもなく、先に復員してきたのは健二の方であったはずだが、道子の中では「健二が勉に似ている」と認識されるのである。

このことは、その後に健二が起こす事件に対する道子の感慨とも連動している。一九四七年の「五月の夜の十時」のこと、健二は「元陸軍将校」の家に刺身包丁を持って押し入り、元将校の妻に言い寄ろうとしている、帰宅してきた元将校によって銃で撃たれそうになって逃走するが、結局、自分が持ってきた包丁によって元将校に刺されて死亡する。このスキャンダラスな事件を、道子は大野の妻・富子から聞かされるわけだが、このとき道子は、かつて庭で健二の姿を見たときに、それが勉と似ていると感じたという記憶を思い出すことになる。つまり、道子の中では親愛の感情を覚える対象である勉と、不気味さを感じる対象である健二とは、「復員者」と

いう記号において重なってしまう。どちらがどちらに似ているのかという起源が不鮮明な状態で、二人のイメー
ジは奇妙に乱反射してしまうのである。

しかも、さらに正確に確認しておくならば、この時「勉もまたそういうことをするようになるのではないか」
と危惧する道子が、「そういうこと」として念頭においていたのは、直接的には「特攻隊崩れの行状に関する新
聞の記事」を指している。そうだとすれば、ここでは健二も勉も共に、「復員者」一般の類型の中に回収される
ことになる。また、さらに加えて確認しておくならば、「覆面」をかぶって事件を起こした健二については、と
ある「文学青年」によって、「マスクをかけて親類の淫売婦を買ひに行く小説」の模倣ではなかったか、とい
う「うがった」観察さえ提示されていた。

つまり、ここでは誰が起源（オリジナル）なのかということが不明瞭なまま、ただ「復員者」という記号だけ
が「似ている」という言葉の下に乱反射しているのであり、勉はまさしくそうした記号を代表する者として「は
け」に姿を現す。しかも、既に確認してきたように、当の「はけ」という空間自体もまた、どこが「はけ」で、
それはだれの所有にかかるものなのか、ということが人々によって正確に把握されていないような場所として提
示されていた。

語り手による「はけ」の地形学に関する細密な描写とは裏腹に、物語はその「はけ」のごく表層において、か
なり不安定な形でスタートしている。それは、敗戦直後の時代状況そのものだったと言えるだろう。

そして、このように不安定な雰囲気を満たした「はけ」の中へ、復員後も「はけ」に留まることなく「学校の友
達の家へ寄寓して気儘な学校生活を送」っていた勉が、再び姿を現す。「復員者」としての彼は、あたかもビル

マの戦場を兵士として行軍するかのような観察眼を働かせながら駅からの道を歩み、今まさに、健二と勉との類似性について語りあっていた道子と富子の目の前に姿を現すのである。いささか出来過ぎの感もある展開だが、先に見た同時代評の書き手たちが一様に言及した第二章までの緊張感とは、概ねこのような構造を指すのだと見てよいだろう。

II 記号と表層

こうして「はけ」に戻ってきた勉は、「はけ」の自然に対する「愛」を媒介として、従姉である道子に寄せる思慕を確認していく。ここで特徴的なのは、石原千秋も指摘するように、勉が予め亡き宮地信三郎（道子の父）の旧蔵書を読み込んで武蔵野の地理についての知見を深めた上で、それを実地検分したいという形で道子を散歩に誘い出していることだろう（石原はそれを「宮地老人の蔵書が何かを動かしている。すなわち、宮地老人の蔵書が勉と道子を「古代武蔵野」の「恋ヶ窪」に導いたのである」とし、そこに「宮地老人」の見えない意志」を見るという示唆的な読解を提示している）。つまり勉は、宮地家の正当な後継者として「はけ」をいわば領有し、そこに自らと道子、すなわち宮地家の系譜を嗣ぐ者たちの居場所を設けようとしているのだと言える。

応じる道子もまた、自らの感情に「恋」という言葉を与えることを回避しようとしながら「勉を抱いてやりた」という直接的な衝動を覚えるという葛藤の中で、野川の水源を探索する勉との散策の際に耳にした、「一人の中年の百姓」が告げる「恋が窪」という武蔵野の地名を引き金に、結局は自らのうちにあった「恋」を認めざるを得なくなっていく。しばしば論じられるように、ここに記されているのは武蔵野の地理の中で、その地理を

担保として（より正確に言えば、地理を語る言葉を担保として）恋に落ちていく男女二人の物語ロマネスクなのであり、いささか通俗的に過ぎるのではないかと感じられるほどに緻密な設定が施されている。¹³⁾

しかし、より注意深く読み返すならば、実は大岡の記したテキストに示されていたのは、もう少しややこしい事態だったのではないだろうか。武蔵野の自然に包まれて成立する二人の恋の物語には、実はいささか不自然な部分が目につくのだ。

まず注意しておかなくてはならないのは、「その名（引用者注、恋が窪）は、前に、勉から聞いたことがある」と記されていたように、道子が実はこの場所にやってくる前に、予め勉から「恋が窪」に関する情報を得ていたはずだということである。つまり、道子はこの日、「恋が窪」で予期しなかった「恋」という言葉に不意打ちされたりたわけではない。むしろこの地名も、さらにはこの地名にまつわる「伝説」についても、道子は相応の知識を持ってこの日の散策に臨んでいたのであり、その意味で二人は共犯関係にあったはずなのだ。

しかし、二人が事前に共有していた「恋が窪」にまつわる「有名な鎌倉武士と傾城の伝説」の物語内容は、実は勉と道子の二人が織りなす物語とそれほど類似しているわけではない。すなわち、西国に出陣した武士（畠山重忠）を待ちわびる遊女（夙妻大夫）が、武士の計報（実は誤報）を聞いて池に身を投げるといふ物語¹⁴⁾は、二人の境遇とさほど似てはいないし（せいぜいのところ西国へ出陣する武士の境遇と、兵士として戦場に赴いていた勉の境遇が重なる程度のことではない）、この伝説の舞台となったのが勉と道子が散策の際にたどり着いた「大きな池」（姿見の池）に他ならないのだとしても、二人がここで、特に自分たちを「伝説」の中の男女に準えたりするわけでもない。つまり、勉と道子の物語は、特に「恋が窪」をめぐる過去の物語＝言葉に支えられている

わけでもないのだ。二人に「恋」を意識させるのはあくまで、地名を勉に尋ねられた「一人の中年の百姓」が「水田で稲の苗床をいじりながら答える、「恋が窪さ」という「ぶつきら棒」な言葉だけなのである。ここでも二人の物語の位相は「はげ」の歴史の古層に届くことがなく、専ら表層に（地名に含まれる「恋」の一字のみに）留まるといべきだろう。

むしろ、この後の物語展開において、二人の感情を確かな「恋」として作動させてしまったのは、皮肉にも道子の夫・秋山から向けられた嫉妬の眼差しであった。しかも、その嫉妬とは、仏文学者であり、自ら翻訳するスタンダールの小説を模倣するようにして「姦通」に憧れている彼が、その「姦通」相手として意識している富子にからかわれることで初めて自覚されるものであって、彼の中で内発的に作動していたものとは言い難いものもある。そして、秋山のこうした内面は、およそ武蔵野の地理とは関係がない。

その秋山の内面は、具体的には次のように記されていた。

しかし重大なのは、二人の間にあるものが真実であるかどうかではなく、それが他人の注意を惹いたといふことだ、と彼の中の「夫」は思ふ。しかもそれを他人にいはれるまで、自分が気がつかなかったことだ。

つまり、「夫」としての秋山は、富子に言われるまで道子と勉に対する自身の嫉妬に気付くことがなかったたであり、自らに「夫」という記号性をことさらに付与するに至って、ようやく嫉妬を自覚することになる。道子や勉もまた、秋山から嫉妬の眼差しを向けられることで初めて、自分たちの「恋」を自覚するに至るのであって、

二人の「恋」にはどこか、内発的な要素が欠けているように語られる。

重ねて、以上のことを語り手は、野川の方から飛んできた「雄雌の双い」の蝶をめぐる挿話として提示する。

秋山はこの蝶たちの姿に道子と勉を重ねてしまうことによつて自らの嫉妬を自覚し、勉と道子はそのような秋山の視線を感じ取りながら自分たちの「恋」を実感していく⁽¹⁵⁾。しかも、ここで見逃せないのは、道子と勉の間で双いの蝶のどちらが自分でどちらが相手なのか、ということに関する認識が逆転していたことだろう。いわば、勉と道子は、どちらが〈追う者〉で、どちらが〈追われる者〉なのか、ということを曖昧にしたまま、ただ「恋」という記号が「はけ」の表層で乱反射するさまに身を任せるだけなのだ。つまり、「はけ」の住人たちはいずれも表層的な記号の乱反射の中にあり、彼らは誰ひとり当事者個人の内面から湧き出てくるようなものとしての「恋」の物語を生きてはいない。彼らの生き方は皮肉なことに、あちらこちらの深い地層から滾々と水が湧き出る「はけ」という空間とは似ていないのだ⁽¹⁶⁾。

結局のところ、勉と道子、秋山と富子という二組の男女はいずれも、本質的には「はけ」の美しい地理とは関わりなく、それぞれの関係を進展させ、隘路に入り込んでいく。

Ⅲ 「空都」としての武蔵野

そして二組の男女は「キャスリーン颱風」が到来する一九四七年九月の夜、一方は「姦通」を敢行し、一方は未遂に終わる、というコントラストをしながら、それぞれに二人きりの一夜を過ごすことになる。

秋山が富子との「姦通」を敢行した富士山麓・河口湖畔という場所に付与された意味はあからさまである⁽¹⁷⁾。

富士山とはもとと静岡の旗本の家柄であった道子の父・信三郎が愛してやまなかつた場所であり、彼は富士山を見晴らすことができるという理由で東京西部の「はけ」に家を構えた人物であった。従って、静岡とは富士山を挟んで反対側に位置する河口湖畔で、信三郎の娘である自らの妻を裏切ってみせるというのは、非常にわかりやすい叛逆のポーズとなる。

もつとも語り手は、秋山による「姦通」とは彼の読む「外国の小説の恋人たち」が「湖のほつりを逍遙」したりすることの「真似」でしかない、とにべもなく切り捨てている。このことは、「姦通」を果たした翌日、二人は河口湖で乗った遊覧ボートの船頭から、湖の中の「岩と島の間を泳いで恋人のところへ通つた娘の伝説」を語り聞かされ、およそ自分たちとは似ても似つかぬ、この初々しい恋の物語によって自分たちが「嘲られたやうに思」わされるといふ展開に見合っていると言える。要するに秋山は「姦通」物語に憧れ、その物語を素朴に模倣しようとしながら、それが伝説の中の「恋」の物語とは似ても似つかぬ不純なものである、という現実だけを手ひどく突きつけられることになるのである。

一方の勉と道子の居場所もまた、わかりやすい象徴性を帯びている。彼らが出かけ、台風のために一晩閉じ込められた村山貯水池は、二人がかつて水源探しの散策をした野川の水源にあたる玉川上水の、さらに水源に当たる多摩川水系の人造湖である。しかも、この地の「地形学」について、勉は例によって宮地信三郎が残した蔵書から知識を得ていた。つまり、二人は宮地家の「はけ」のルーツを確認し、それを二人で嗣いでいくかのような態度を示す。

とはいえ、実は勉は村山貯水池に関する知識を富子に対しても語っていた。その意味で、この場所への関心は

必ずしも勉と道子の二人だけによって占有されていたわけではない。しかも富子の関心は、この付近が「所謂アベック休憩のホテルがある」ような「東京市民ことに男女学生の興趣を引くような場所であったことにあり、勉をそこへと誘い出そうとしたのだが、勉には「にべもなく断られ」てしまう。彼女が秋山の誘いに応じたのは、勉の拒絶に遭って「自棄」を起こした結果だったのだから、勉と道子が村山貯水池で一夜を共にするきっかけを与えた張本人は、「はけ」にとつての〈よそ者〉である富子だったことになる。

また、ここで留意すべきなのは、太古からの地形学的な歴史についての知見を書物から学ぶ勉が、富子の意識した「アベック休憩のホテル」のような、この土地に刻まれている戦前から戦後にかけての記憶＝歴史の表層には関心を示していないということだろう。多分に気持ちを荒ませながらも戦後という現在をたくましく生きる富子と対照するならば、主人公たる勉には、まるで戦後の現在＝現実というものが見えていないかのようだ。このような勉のあり方を象徴的に物語るのは、次のくだりであろう。

「風来るかしら」

といつて道子は空を仰いだ。低い雲の下をさらに低く、双発機が一つ、銀色の翼を鈍く光らせて、附近の飛行場を、目指してゆるやかに下降しつゝ、あつた。

「大丈夫さ。雨が降つて来たら、引き返せばいい」と勉は笑つた。「傍点引用者、以下同様」

到来しつゝある台風に対する見通しの甘さは、あるいは帰宅できなくなる可能性を予め見越した振る舞いだつ

たかもしれないが、ここで留意しておきたいのは、そのような二人の振る舞いが上空の飛行機によって見下ろされていくという構図である。

言うまでもなく、二人を見下ろす飛行機とは日本を占領・統治している米軍のものであり、「附近の飛行場」とはおそらく、米軍に接収された調布や立川などの飛行場を指す。つまり、勉と道子が地形学的な関心に重ね合わせながら愛を育む武蔵野とは、実のところ戦前・戦中において「空都」とも称された軍事エリアに他ならない。鈴木芳行『首都防空網と〈空都〉多摩¹⁸』がいうように、「三宅坂の航空本部」と「中央線で立川に直接連絡できる利便性」を有し、「広大で安価な隣接地」と「水利・水質の良好性」に恵まれた武蔵野にはかつて、「空都」と呼ばれるほどに飛行場や関連施設（飛行機工場など）が集中していたのである（図3参照）。

戦後、この「空都」の施設は米軍に接収され、その管理下に置かれていたのであり、勉と道子の散策はいわば、こうした戦後の現実¹⁹。「社会的条件」のなかにある。そうであってみれば、貯水池の畔で監視人の目を盗んで「兵隊らしい狡知を見せびらか」すように振る舞う勉は、ここではむしろ自分こそが見下ろされ監視される側の人間であること——占領下にある敗戦国の人間であるという現実に対して無自覚であると言わざるを得ないだろう。しかし、本文を丁寧を確認するなら、武蔵野における戦後の現実／歴史の表層というものが勉の目に全く映っていないわけではないということも見えてくる。例えば、道子との関係を深める以前、「はけ」の自然を自分が経験してきた戦地のビルマに重ね併せながら散策を繰り返す勉について、語り手は次のように述べていた。

野に出た。「…」小屋が一つ荒廃して、硝子や漆喰が散乱してゐた。戦争末期に着工された飛行場の残骸

「…」

名だつたある航空会社の社長の名前を告げた。

こゝにも門標はなかつた。運転手に訊くと、「知らないのか」というような侮蔑の表情をして、戦争中有

と、道は藁葺の屋根を持った大きな門に入り、一台の木炭自動車が止つて、運転手が新聞を読んでゐた。辿つて行く

であつた。「…」



図3

洋泉社編集部編『知られざる軍都多摩・武蔵野を歩く』二〇一〇・八、洋泉社）より引用。地図中の数字は以下の軍事施設・軍需工場の位置を示す。

①中島航空金属 ②大日本時計田無工場 ③朝比奈鉄銅保谷製作所 ④中島飛行機武蔵製作所 ⑤豊和重工業東京工場 ⑥横川電機製作所吉祥寺工場 ⑦日本無線 ⑧三鷹航空工業 ⑨正田飛行機製作所 ⑩航空研究所 ⑪鉄道省運輸研究所 ⑫中島飛行機三鷹研究所 ⑬調布飛行場 ⑭傷痍軍人東京療養所 ⑮陸軍兵器補給廠小平分廠 ⑯陸軍経理学校 ⑰帝国精機製造小金井工場 ⑱多摩陸軍技術研究所 ⑲中央工業南部工場 ⑳日立中央研究所 ㉑陸軍燃料廠 ㉒東京芝浦電機府中工場 ㉓日本製鋼所武蔵製作所

別の日、彼は野川の向うの楯状の台地を越えて、府中の方まで足を延した。彼の選んだ古い街道は新しい自動車道路とどこまでもからみあつて続いた。かつての立川飛行場の附属施設には、今は白いチャペルが十字架を輝かしてゐた。

勉が地形学的関心に基づいて散策を繰り返す武蔵野の表層には、かつてこの一帯が「空都」であつたことの痕跡が、かくもあからさまに点在していたはずである。つまり勉は、こうした痕跡に目をつぶるようになつて、武蔵野の美しい自然だけを見ようとしていたことになる。

創元文庫版（一九五二・二）以来、今日の流布本文である新潮文庫版まで、この小説の巻頭に置かれ続けている「武蔵野夫人」小説地図」は、まさにこうした勉の認識する武蔵野そのものであり、同時代評以来、今日に至るまでのこの小説をめぐる評価・研究史は、概ねこの枠組みを出ることがない。しかし、ここで想起しておきたいのは、作者・大岡昇平がこの作品に先行して書かれていた『俘虜記』連作の中で、俘虜収容所内の空間配置について説明するために図版を挿入しつつ、以下のような屈折した文言を綴つていたことである。

文字をもつて対象を書き尽すべき文学者として、図形の助けを藉りるのは屈辱であるが、小学校の進歩的教育によつて、視覚的に甘やかされた現代の読者は、我々が文字をもつて記述するところを、まづ図形として脳裡に描くと信すべき理由があるから、いつそ図形を入れてしまつた方がお互ひに手間が省ける。

大岡昇平はこのように、小説本文の中に図版を用いることについて批判的な立場を記しながら、その本文の中に図版を挿入する、というような屈折した振る舞いをする小説家であった。そうであつてみれば、読者としての我々は、そう素朴に巻頭に置かれた地図だけを前提にして、小説本文を読むことはできないのではないか。この地図はつまり、勉がそのように見たいと願つた（いわば、幻視した）〈夢〉の武蔵野なのであり、この地図によつてミスリードされた読者は、語り手によつて提示されていたはずの〈現実〉の武蔵野の位相——勉の視野にも確かに収められていた、占領下における武蔵野の姿を捉え損ねてしまうことになる。必要なのはむしろ、勉の願望に即したようなこの地図において何が書き落とされたのかということ、小説本文と付き合わせながら検討することではないだろうか。

IV 「水道管」と東京の現実

道子との姦通が未遂に終わった後、「はけ」を追われるようにして去り、再び大学生活に戻つた勉は、俄に戦後の現実の位相を見つめ始める。その勉が一人暮らしを始め、後には富子の方と関係を持つことになるアパートが目黒川流域にあつたとされていることには、古田悦造²⁰が指摘するように象徴的な意味があるだろう。目黒川は、「はけ」を流れる野川のような多摩川水系とは全く関係なく東京湾へと注ぎ込む小さな河川である。そして、敗戦直後には「一面の焼跡」となり「太古の地形」が露出していた周囲の風景は、早くも「復興」の兆しによつて覆われ始めている。勉はここで、武蔵野で過ごす時間の中では目を背けていた戦後の現実を否応なく見せつけられる格好となる。

そして、こうした都内の地理風景と連動するようにして、勉の内面もまた急速に変化していく。

「はげ」を離れた勉は、大学へ積極的に顔を出す代わりに、ひとり「本を読み」ながら「思想らしいもの」を身につけ始める。「実存主義」や「記録文学」といった戦後ジャーナリズムの中の〈様々な意匠〉を手にとっては手厳しく批判的に概括していく語り手の説明は、「馬鹿の色男」(「構想ノート」²¹)として造形されたはずの主人公の内面にはいささか似つかわしくないが、言うまでもなくこうした勉の造形は、戦前に行ったスタンダードの翻訳によって、戦後俄に印税成金とでもいべき境遇に立ち至った大学教師・秋山とコントラストをなすものである。そして、フランス文学を「姦通」文学として矮小化し、姦通罪廃止の時流の中でそれを安易に模倣しようとするばかりの秋山とは異なり、勉の方は読書を通して出会った「共産主義」に対して、それなりに真剣な関心を抱く。

とはいえ、戦場を経験してきた青年世代としての勉にとって、「共産主義」の「通俗解説書」の中に記された「社会運動史」は「戦争中の戦記に負けぬくらい嘘と便宜で固められてい」としか思われない。従って彼は、戦前のマルクス主義青年たちのように、社会の発展／進化の歴史を語り、来るべき革命への道を考える唯物史観の見取り図の中で「共産主義」に関心を持つわけではない。つまり、ここで勉の関心は歴史ではなく現実の「社会」とそれを支えている諸条件へと向かい始めているのであり、「共産主義」の思想とは、そうした条件を考察するための方法をもたらすものと見なされている。

そして、俄に獲得したこの「共産主義」的な認識によって、勉は「道子の拒否」を「人妻といふ社会的条件の結果」とみなし、「自分の恋を社会化することによって、「はげ」の自然に耽溺しながら遂行しようとしていた

道子との関係について一定程度、客観的な把握を試みようとし始める。無論、一方で彼はまだ「古本屋で武蔵野に関する本を眼につく限り買い集め」て「眺め入」る程度には武蔵野の自然に惹かれているが、これはあくまで自分で購入した古本であり、かつてのように宮地老人の遺した蔵書を読み耽り、実際に武蔵野を散策していた頃と同じ地平にはいない。

一方の道子もまた、勉と一度離れることによって、自身がこれから生きていくための「社会的条件」について考えることを余儀なくされていく。そのことは第十章の冒頭に繰り返し記される「役割」という言葉に顕著である。道子は自らを規定する「役割」——宮地の「娘」という「役割」、秋山の「妻」という「役割」、そして夭逝した兄たちに代わって「はけ」を相続する者としての「役割」について、真正面から向き合わざるを得なくなるのである。

このとき、「はけ」とはもはや、恋を育む美しい自然としてのそれではなく、端的に「財産」として定義されることになる。第一章の冒頭部分が「はけ」の所有権に関する変遷を提示するところから始まっていたことを思えば、こうした物語展開は当然の帰結だったと言えるだろう。そして、勉が「はけ」を離れている間に、道子と秋山、富子と大野という二組の夫婦が交錯し、結果として道子は「はけ」の相続者の位置から転がり落ちるよう⁽²⁾にして毒を仰ぎ、自ら命を絶つ。

しかも、一度は医者⁽²⁾の処置によって一命をとりとめたかのように思われた道子は、その後に容態が急変し、混濁した意識の中で、あるうことか秋山を勉であると勘違いしながら死んでいく。語り手がそれを「事故」と呼び、「事故によらなければ悲劇が起らない」というように、「はけ」という空間には物語（ロマネスク）は不在であ

る。そこにあつたのはもともと、財産とその相続をめぐる極めて世俗的な物語だけだったはずなのだ。ここに住まう二組の夫婦は、その相続にまつわる諸問題を、秋山の印税成金ぶりや、大野の自転車操業的な会社経営によって先送りしていたにすぎず、そこで繰り広げられていた「姦通」（ないしその未遂）などは、不安定な「社会的条件」の下での一過性の遊びでしかなかったということになる。

一方、物語の終わりにおいて「はけ」から姿を消している勉の方は、財産とその相続に関する問題について、実は予め現実主義的な処分を行っていたのだということが、第二章の段階で明示されていた。すなわち勉は復員したばかりの段階で、自死した父（軍人）の遺産をめぐる継母やその子どもとの間で浮上した相続問題について、新民法の適用が及ばないうちに対処し、父の遺産の半分を獲得した上、それを売却することによって相應の金額を早々に手にしていたのである。勉のこうした速やかな対処は、「はけ」の人々のありようとは鋭く対照をなす。

つまり、「はけ」の自然に耽溺しながら道子との恋の物語＝フィクションを生きようとしていた勉の視野の片隅には、最初から現実の位相が収められていた。そして、財産問題をめぐって「はけ」の人々が慌ただしく動き回っていた頃、すでに勉はひとりで武蔵野を散策しながら、かつて一時的に耽溺していた「地形学的幻想」の向こう側へと足を踏み出している。

この時勉が歩く武蔵野とは、「飛行機の爆音に充ち、航空戦の演習の飛跡を残して、高く飛行雲が白い巨大な円を描くような空の下にある土地に他ならない。そして、勉は既にこのとき、「道子のこと」ではなく「世間のことを考えていた」。たとえそれが「道子への恋に対する障害としての世間」に限定されていたのだとしても、

彼の関心はもはや「はげ」を舞台にしたロマネスクそのものではなく、そのようなロマネスクの成立基盤としての「社会的条件」の方を向いている。

その意味で、変化の兆しを見せ始めた勉が、かつて道子と散策し愛を育んだ武蔵野の貯水池を散策しながら、この場所の自然について思いを馳せるのではなく、ここから「無数の東京の家庭」へと接続される「水道管」について想像をめぐらせていることは、勉のありようを象徴的に示すものとして興味深い。

言うまでもなくこの貯水池は東京都民の水甕として造成されたものである。そして、自然の河川によって構成される水系とは別に、ここから延びる「水道管」は武蔵野と東京の都市部とをフラットに接続する。勉と道子による野川の水源探索に見られたように、物語の中でしばしば象徴性を与えられてきた水系をめぐる記述はここで俄に後景化し、代わって人々の現実生活の次元が前景化することになる。「この取水塔に毒を投げ込めば、東京都民を一挙に擧殺できるかも知れない」という勉のテロめいた空想は荒唐無稽ではあるが、こうした空想によって勉が認識するのは、〈占領下日本〉という時間／空間のフラットさであろう。そしてその瞬間、道子とのロマネスクを育む土壌としての武蔵野への「地理的興味」は「一種の感情的錯誤」による「地理的迷妄」でしかなかったものとして斥けられることになる。

「工場と学校と飛行場と、それから広い東京都民の住宅と、それがいまの武蔵野だ」という勉の認識は、戦後日本の現実そのものを見つめるものだろう。²³戦後の（経済的）復興を支える「工場」、新しい教育が行われる場としての「学校」、そして、人々にGHQによる被占領という現実を突きつける「飛行場」＝米軍基地——こうした事物が布置された空間において人々（東京都民）は「住宅」を構えて日々の生活を営み始めていたのであ

り、「武蔵野」という空間もまた、このような戦後日本のそこかしこに存在する場の一つでしかない。

登場人物の中で最も〈大人〉らしさを体現し、〈現実〉を生きていると目される大野が、物語の末尾においてその行く末を想像し、「一種の怪物」になっていくのではないかと危惧していた主人公・勉は、結局のところ武蔵野を「通り過ぎていく」⁽²⁴⁾ばかりであり、彼がこれからどこに向かうのかということが明示されることはない。しかし、少なくとも言えることは、敗戦後の日本の現実の中には、勉や道子が幻視しようとした意味での〈ふるさと〉としての「はげ」は、はじめから存在していなかったということである。小説冒頭に置かれたあの地図は、幻視される〈ふるさと〉の影に他ならない。

「主人公」としての勉が、自ら幻視しようとした武蔵野の影を踏み破り、戦後の現実そのものへと〈復員〉していく物語——。その意味で、小説『武蔵野夫人』とはたしかに勉を主人公とした〈復員〉小説であった。

「記録文学流行の折柄、同じ形で（引用者注、長らく書き継いできた連作『俘虜記』における）自分の最後の言葉を吐くのが、急に嫌になった」⁽²⁵⁾という作家・大岡昇平は、『俘虜記』の主人公／語り手を日本に帰還させることによって閉じる前に、恋愛小説の枠組みを借りながら、若き一人の元兵士の〈復員〉の形——戦後の現実への〈上陸〉のさせ方を、この小説において試みていたのかもしれない。

注

(1) 大岡昇平『作家の日記』（一九五八・七、新潮社）所収。

(2) 拙稿「書くことの倫理——大岡昇平『俘虜記』論序説——」（『語文論叢』28、二〇一三・七）参照。

- (3) 大岡昇平「わが小説『武蔵野夫人』」(『朝日新聞』一九六一・一一・二〇朝刊)および大岡昇平・埴谷雄高「対談」二つの同時代史(第一五回)——「武蔵野夫人」のころ——(『世界』一九八三・三)を参照。
- (4) 福田恆存「戯曲武蔵野夫人」(『演劇』一九五一・六)。
- (5) 単行本版における「第二章 復員者」にあたる。
- (6) 福田恆存「武蔵野夫人」論(『群像』一九五〇・九)。
- (7) 中村光夫・本多秋五・三島由紀夫「創作合評」(『群像』一九五〇・一一)における発言。
- (8) 注(6)に同じ。
- (9) 山本健吉「武蔵野夫人」の問題——文芸時評——(『人間』一九五〇・一一)。
- (10) 小林秀雄「武蔵野夫人」(『新潮』一九五一・一)。
- (11) 例えば、前田愛『幻景の街——文学の都市を歩く』(一九八六・一一、小学館)など。
- (12) 石原千秋「教養として読む現代文学」二〇一三・一〇、朝日新聞出版)。
- (13) 大井田義彰「大岡昇平『武蔵野夫人』考——「二種の怪物」をめぐる——」(『学芸国語国文学』30、一九九八・二)は、この事態を「ふたりの恋愛そのものが言葉で、モノではなくて言葉を媒介することで成り立っていた」の点と的確に指摘している。
- (14) 『国分寺市の文化財』(二〇〇二・三、国分寺市教育委員会)参照。
- (15) 岡野宏文・豊崎由美『百年の誤読』(二〇〇四・一一、ぴあ)は、この「隠喩的なシーン」のあからさまな(わかりやすさ)を捉えて、「下手」であり「失敗」であると端的に批判している。
- (16) 立尾真士「悲劇」・「誓い」・「事故」——大岡昇平『武蔵野夫人』論——(『文藝と批評』10—7、二〇〇八・五)は、この小説では「登場人物各々やその心情、或いは周囲の美的な「自然」は、常に人工的な産物としてある」と的確に指摘している。
- (17) 古田悦三「『武蔵野夫人』の地理学的一考察」(『東京学芸大学紀要 第3部門 社会科学』56、二〇〇五・一)

は、この物語に登場する武蔵小金井（野川流域）、村山貯水池、五反田（目黒川流域）、河口湖という四つの空間の地理学的特性をまとめた上で、その空間配置に込められた隠喩性について、明晰な分析を行っている。

(18) 鈴木芳行『首都防空網と〈空都〉多摩』(二〇二二・一二、吉川弘文館)。

(19) 『俘虜記』最終章「帰還」の末尾近くには、「私」が帰還船から見た光景として、「沖繩の基地に属すると思しき」飛行機が、自分たち俘虜を見下ろしながら去って行くという象徴的場面が描かれている。

(20) 古田『武蔵野夫人』の地理学的一考察〔注17参照〕。

(21) 注1参照。

(22) 溝口健二による映画版（一九五一、東宝）では、この臨終の場に勉本人を立ち会わせているが、大岡の小説はむしろこうした悲劇的なドラマの不成立をこそ描いていたはずである。

(23) 映画版『武蔵野夫人』（注22）において、「武蔵野」に関するこうした認識は、勉に宛てた道子の遺書を読み上げるナレーションで提示されるものとなっており、その声に促されるようにして復興する東京の町並み（現実）を視野に収める勉を描くところで物語は閉じられる。すなわち映画版は、道子との成就されない悲恋を通して勉の成長を描くという枠組みで構成されているわけだが、原作小説における勉はあくまで「はげ」を（そして道子を）「通過」するだけであり、その成長（現実認識の獲得）は道子によって与えられているわけではない。

(24) 大岡・埴谷「対談」(二つの同時代史)〔注3参照〕。

(25) 大岡昇平『武蔵野夫人』ノート（『作家の日記』一九五八・七、新潮社）。

〔付記〕『武蔵野夫人』本文の引用は初版単行本により、旧字を新字に改めた。